

ヒューム主義と規範性

竹内聖一（東京大学）

行為の理由についての理論の一つに、動機づけに関するヒューム主義（以下ではヒューム主義と略す）がある。ヒューム主義によれば、行為を動機づける理由は、欲求と信念の双方を含んでいなければならない。そして、信念は目的を実現するための手段を見つける際にその役割を果たし、欲求は行為の目的を設定する際にその役割を果たす。さらに、信念はその本性上、合理性の観点から批判されたり吟味されたりしうるが、欲求はそうした批判や吟味とは無縁である。

ヒューム主義は、ある目的を実現するための手段を導くという実践的推論の基本的な図式に適合するだけでなく、行為論や倫理学に登場する様々な議論とも接点を有している。デイヴィドソンの欲求信念モデルや、ウィリアムズの外的理由と内的理由の区別などをその事例として挙げるができるだろう。

その一方でヒューム主義はしばしば批判されてきた。批判者たちは次のように主張する。まず、行為を動機づける理由がかならず行為者の欲求を含んでいなければならないという想定は疑わしい。信念は、欲求の助けを借りることなしに行為の動機づけを与えることができる应考虑すべきである。また、ヒューム主義によれば、ある人の行為が合理的かどうかは、その人の欲求にとって当の行為が適切な手段となっているかどうかという観点からのみ評価されることになる。すると、何らかの道徳的な義務に反する人を不合理であるとして批判することはできなくなる。その人は単に、その義務に従うのに必要な欲求とは別の欲求をもっているというにすぎない。そしてヒューム主義によれば、ある欲求をもつこと自体が合理的であるかどうかを問うことはできないのである。これは、道徳的な義務を行為者に対する要請ととらえ、それに反することを不合理性の表れとみなす哲学者にとっては受け入れがたい帰結である。

本発表ではヒューム主義に寄せられたいくつかの批判の要点を整理した上で、ヒューム主義が、行為の理由に関する理論としてどの程度有効なのかを検討したい。